

全国言論労働組合と t b s 支部

(チェ全国言論労働組合政策局長、ムーン t b s 支部長)

2018 年 9 月 3 日

(文責：長尾拓真)

以下は、ソウル市の Traffic Broadcasting System(以下 tbs)で伺ったインタビューのまとめである。お話しをしてくださったのは、全国労働言論組合のチェ政策局長とムーン t b s 支部長のお二人だった。

韓国の言論従事者について

韓国での放送作家は、プロデューサーとディレクターが混ざったような重い仕事であり、セリフだけでなく、コンテの制作などもおこなっている。その放送作家のほとんどがフリーランサーである。一人のプロデューサーに二人の放送作家が必要になるのだが、その推計で言えば、一万人くらいが非正規ではないかと言われていて問題となっている。また、新聞やカメラマンにもフリーランサーが多く、彼らをどうするのかという課題もあるが、そこまで話題になっていない。フリーランサーは請負、自営という枠組みで、労働者性を認めるかどうかは複雑な問題である。日本では労働者性は多めに認められるが、韓国では非常に厳しい。しかし時代の流れが変わったので、約束という形で民法では保証するという形になった。だが依然としてフリーランサーをどうするのかは難しい問題である。

言論労働組合について

放送だけでなく、印刷や出版などあらゆるものが全国言論労働組合に入っている。企業別労働組合だけのところはあるが、産別に入ろうとすれば全国言論労働組合しかない。(言論労働組合の専従として)勤務しているところは労働組合の政策室というところで、普段は政策を作っていくことをしている。なので、国会議員に圧力をかけて、国会で質問させたりとか、政策的な法制化をさせたりとか、そういうものをやるのが主な仕事である。ただ、tbs 支部を正規化していくことにあたって(tbs の制作スタッフはほとんどが非正規である)、これはインパクトがある仕事なので、もとは組織室の仕事だが、それを引き受けて行っている。

tbs(Traffic Broadcasting System)について

キャンドルデモの時、最初はマスコミが生で様子を見せたというのはほとんどなかった。tbs だけが三階から生放送をやっていて、市民の生の声をそのまま伝えるコーナーを作り、人気が出た。ほかの放送でやっていないものをずっとやってきたということで、それをきっかけに交通の放送から、公営の放送というか、市民の放送というか、そういったイメージができたのではないかと考えている。マスコミの立場でキャンドルデモを見た感想だが、最初のころは最後のような情熱のあるデモにまで発展すると思っていたいなかった。というのも、2008 年にキャンドルデモがあった時には、次第に衰退していった。そういう経験があった

ため、最初にデモに参加した時は、そこまで発展しないのではと思っていたが、やはり市民が考えていることを抑圧され、それがキャンドルデモを通して爆発した、つまり全部噴出した形だったのではないかと感じている。韓国では地域主義が非常に強く、特にプサンなどは非常に保守的な色合いが強いが、そういった地方からバスを借りてデモに参加しに来る人々が多かった。地域主義が衰退していくのではないかと感じた。若者の参加については公式の記録がなく、数的なことは言えないが、私(チェさん)の経験的には若者がすごく参加していたように思う。韓国の若者は投票率が低く、政治参加をあまりしない認識だったが、今回のデモから、政治に関心を持つべきだという風潮に変わったように感じられる。

その他興味深かったインタビュー

日本に行った先輩が、日本の組合員の方はだいぶ高齢で、君はすごく若いんだと言っていた。だが、韓国でも民主労総の組合の平均年齢が 45 歳となって高齢化している。韓国の青年ユニオンは民主労総に入っていない。その理由は青年ユニオンの人が言うには、民主労総に加わると主体的に動けなくなる恐れがあるからだという。若者が独自に動いて活動するのだ。ただ韓国の若者すべてがいきいきとして働いているわけではない。自分(チェさん)が影響を受けたのは 2008 年のキャンドルデモだった。そこで出会った大学の先生から、言論労働組合を紹介してもらって入ったという経緯がある。自分がこういう仕事に就いたのは、デモの経験で、社会をこういう風に変えられると思ったからだ。

インタビューをまとめて

今回の韓国労働調査において、私がまとめたのは全国言論労働組合、tbs のインタビューである。大まかに上記の四つとしてまとめたが、ここで振り返ってみる。

韓国の言論従事者について、彼らは仕事量が非常に多く、また専門的なものであるにもかかわらず、非正規で働く人々が多いのが、韓国における言論従事者の実情であることがわかる。

全国言論労働組合について、tbs の制作スタッフはほとんどが非正規であることが、インタビューで語られた。そのことから、特に今言論労働組合が行っている仕事として、tbs における正規化の話が出ている。ソウル市の正規化運動が大きいものであると、改めて感じさせられた。キャンドルデモについて、ここで意外だったのは、キャンドルデモ以前の若者像が、日本と酷似していることだ。日本の若者(20 代 30 代)の投票率が下がりつつある。韓国の若者は政治意識が強く、そのため行動的でキャンドルデモに参加したのではなく、逆にキャンドルデモから政治意識を持つべきだという風潮に変わったことが、驚くべきことだった。

一連の調査を通じた感想として、韓国の労働者に向けた動きが活発になっていることをひしひしと感じた。また、労働組合というものの大きな存在感を感じることもできた。労働の形が多様化していく中で、あくまで労働者としての権利を守っていくことが、今後の日本

で注視していくべきことであると思う。労働が苦痛であってはならない、労働が正しい形で
いるために知見を仕入れ、吟味し、行動していきたい。

以上